【380】

氏　名（本籍）	後藤秋正（ごとうあきのぶ）（北海道）
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	博　乙　第　2267　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**中国哀傷文学研究**

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	松　本　　肇
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	芳　賀　紀　雄
副　査	筑波大学助教授		小　松　建　男
副　査	筑波大学講師	博士（文学）	稀　代　麻也子
副　査	筑波大学教授	文学博士	堀　池　信　夫

論文の内容の要旨

本論文は，中国古典文学において，文学者たちが自己，あるいは他者の死に直面した時，死をどのように受けとめ，死にまつわる感慨をいかに作品として定着させていったかについて，実際の作品に即して分析・考察したものである。本論文の構成は，以下のとおりである。

序

第一編　臨終の文学

第一章　「臨終詩」の成立とその展開／第二章　崔篆の生涯とその「慰志賦」／第三章　魏の甄后の死と「塘上行」／第四章　太原の妓女の詩と欧陽詹／第五章　遼の蕭后の生涯とその文学／第六章　唐詩に見られる「臨終」の語について／第七章　『全唐詩』中の「臨刑・臨化」詩

第二編　夭逝者哀悼の文学

第一章　哀辞考／第二章　蔡邕「童幼胡根の碑銘」と哀辞－禁碑のもたらしたもの－／第三章　王維「宋進馬哀辞」考／第四章　幼児の死を悼む詩／第五章　幼児の死を悼む賦／第六章　夭逝者の墓誌銘

第三編　悼亡と送葬の文学

第一章　「悼亡賦」論／第二章　「送葬詩」論／第三章　「帰葬詩」の成立とその展開

結

序は，本論文の目的と構成について説明している。

第一編は，人生最期の文学的営みである「臨終詩」の歴史的変遷に焦点を当て，「臨終詩」とその作者，さらにはこれらと関連する作品について論じている。第一章では，「臨終詩」は人生の中途で非命に倒れようとする者の胸中を吐露し，人生の軌跡を後世に残そうとする作品として孔融・欧陽建らの手によって成立したが，六朝末期に至ると，その制作は仏僧に独占されるようになり，仏教的な悟りの境地を述べる場に変容していくことを明らかにした。第二章では，「臨終詩」の先駆的作品と考えられる，後漢の崔篆の「慰志賦」

を取り上げ，これが王莽の新王朝の激浪に翻弄されながらも，自己の信念に忠実に生きようとした知識人の，苦闘の精神史となっていることを指摘した。第三章では，『鄴都故事』（『楽府詩集』題解引）に臨終の作として引かれる魏の甄后の詩が，彼女の作ではなく，古辞であるとする説が妥当であることを論証した。第四章では，「絶命詞」と見なされている，太原の妓女の「寄欧陽詹」詩の成立過程を検討し，この詩が崔鶯鶯の詩などと孟簡「詠欧陽行周事」が結びついて創作されたものであることを検証した。第五章では，遼代の優れた女流詩人である蕭后（蕭観音）に，「絶命詞」が残されていることに着目し，彼女の死に至る経緯を詳細に記述する王鼎の『焚椒録』に基づいて，「絶命詞」が書かれるに至った背景とその文学の特質について明らかにした。第六章では，詩題と詩中に「臨終」の語を用いている唐代の詩人には，文学上の交遊関係が背景にあることを論じた。第七章では，「臨終詩」の近縁に位置する，「臨刑詩」と「臨化詩」について考察し，これらの詩の多くが，唐代末期の道教を尊崇する風潮の中で生まれたことを論じた。

第二編は，夭逝者を哀悼する文学について論じている。第一章では，夭逝者を哀悼する文体として発生した哀辞の歴史的変遷の様相をたどるとともに，唐代には，哀辞よりも詩において幼児の死を哀悼する傾向が生まれたことを指摘した。第二章では，蔡邕「童幼胡根の碑銘」を哀辞の系譜中に位置づけ，蔡邕がこの碑銘を撰述したことが哀辞成立の契機となったこと，また，曹操らの禁碑の令が，哀辞の成立に大きく影響していることを指摘した。第三章では，王維「宋進馬哀辞」を取り上げ，この作品が哀辞と誄の区分が失われてゆく転換点に位置する作品となっていることを明らかにした。第四章では，幼児の死を哀悼する詩を取り上げ，漢魏晋南北朝期には，哀辞が幼児の死を哀悼する文体として別に存在していたために，詩における哀悼の念の表出は主流とはなっていなかったこと，および幼児の死を主題とする詩が，唐代になって確固とした地位を占めるようになったことを明らかにした。第五章では，漢代から六朝末期までの，幼児の死を哀悼する賦を取り上げ，幼児の死を賦に詠ずる営みが建安時代に集団の場で試みられるようになったこと，およびこれらの伝統が江淹，庾信に継承されていったことを論じた。第六章では，夭折者の死を記録する墓誌銘を取り上げ，唐代に，銘文の多様化と個性化が顕著になることを指摘した。

第三編は，悼亡と送葬の文学について論じている。第一章では，従来ほとんど考察の対象とされなかった「悼亡賦」の成立と展開について論じるとともに，鮑照「傷逝賦」，劉禹錫「傷往賦」などの作品を取り上げて分析を加えた。第二章では，北朝から唐代に至るまでの送葬詩を取り上げて，各作品についての分析と考察を試み，送葬詩が哭人詩，弔人詩に吸収されていくことを指摘した。第三章では，帰葬詩の成立と展開について論じ，唐代になると，帰葬詩が増加して，送葬詩中の一領域を形成するようになったことを明らかにした。

以上をまとめて，全体の結びとする。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，死にまつわる哀傷をテーマとする作品を取り上げて，歴史的な観点から考察を加えたものである。中国古典文学研究の世界では，文学史上に大きな位置を占める特定の文学者や著述に関する研究が主流となっていて，本論文のように特定のテーマに密着した研究はそれほど多くない。このような学界の動向の中で，本論文のもつ研究史上の意義はまことに大きい。本論文は，哀傷文学に関係する資料を多く挙げていくことにより，哀傷の文学史を構築することに成功している。これは，本論文の最大の特徴にほかならない。

本論文における作品の分析の特色は，様々な資料に基づいて作品の背景となる事実を丹念に調査することから出発していることである。その上で，先行作品からの影響，後世の作品に与えた影響などを論じ，哀傷文学としての特徴的な表現や作品の構造を詳しく追究している。文学研究の論文の中には，ともすれば統計をとり数字を羅列するだけで満足しているものがある。だが，文学の本質を数字ではかることはできない。

実に粘り強く丹念にひとつひとつ作品を挙げ，かつ独自の読みを与え続けようとする著者の真摯な姿勢は，きわめて貴重である。本論文で，著者は，数字をあげて終わるような安易な研究手法に対して警鐘を鳴らしているとも言える。

著者は，30 年近くもの間，終始一貫して哀傷文学の研究に取り組んできた。本論文に収められた論考は，そのどれもが哀傷文学への情熱に支えられている。一篇一篇に，死にまつわる作品に対する並々ならぬ関心を漲らせていて，哀傷文学という研究テーマが，著者にとっていかに切実であるかが伝わってくる。本論文には，研究者としての著者の熱い血が通っているのである。

本論文は，死ぬということについての考察である。死に対する考察は，文学の根幹にかかわる大きな問題であり，今後はさらに様々な試みが要求される。本論文では，死というものを，自己の死と，他者の死に分類して論じているが，観念上の死や想像上の死，さらに伝説化した死についても論じるべきだろう。自他という枠を越えて死と文学について考察する必要がある。その際には，死を表現する様々な文体の存在理由についての考察を深めることも重要な課題である。

以上のような問題を視野に入れ，今後さらに探求を続けるならば，哀傷文学というテーマがさらに魅力を増し，学界に大きく寄与することは間違いない。本論文が，哀辞，悼亡の詩賦，送葬詩，帰葬詩，幼児の死を悼む詩賦や墓誌銘など，死の悲哀と関わる文学作品を，歴史的な視点に基づきながら多面的に分析し，それぞれの作品のもつ文学史的意味を明らかにしたのは，中国文学研究における初めての試みである。本論文が哀傷文学研究という独自の分野を開拓した功績は高く評価することができる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。